先端技術と分散に活路 新たな東京観光の形、官民で模索

東京観光 復活への道筋（上）

#東京 #インバウンド #関東

2022/4/21 2:00 [有料会員限定]

東京観光バスツアー「ワゥ ライド」に使うバスは、車窓に透過有機ELディスプレーをはめ込みVR・AR技術を駆使した眺めが楽しめる

新型コロナウイルス禍で大打撃を受けた東京都内の観光業界が逆境を乗り越えようと奮闘している。デジタル技術を駆使した新たな商品開発や、週末に偏りがちな旅行者を分散させて感染リスクを抑える取り組みが進む。社会環境の変化に左右されにくい持続可能な産業に転換する必要性が浮き彫りとなるなかで官民が知恵を絞る。

銀座発、空想行き――。こんな斬新なキャッチコピーのバスツアー「WOW RIDE（ワゥ ライド）」を広告会社のクオラス（東京・品川）が企画した。定員20人の大型バスで2～3月に1日4便運行したところ、全便が予約で埋まる人気となった。

先端技術の活用でタイムスリップしたような感覚が味わえる東京観光バスツアー「ワゥ ライド」の車内

車窓に透過有機ELディスプレーをはめ込んだバスで、銀座から東京駅や国会議事堂、お台場など都内各所を巡る。普段の景色を楽しんでいると、突然、江戸時代にタイムスリップしたり、空を飛んだり、地下に潜ったりと、目の前の眺望がめまぐるしく変化する。

拡張現実（AR）や仮想現実（VR）の技術を駆使することで、日常の風景を、新たな観光コンテンツに生まれ変わらせた。「国内需要を喚起するには既存の観光資源を新しい形で見せる発想が必要だ」と担当者。同社は今夏、人工知能（AI）を活用してエンターテインメント性をさらに高めたバス旅行を計画中という。

公益財団法人日本交通公社が2021年11～12月に実施した日本人旅行者の動向調査によると、コロナ禍のもとでも旅行に行きたいと回答した925人のうち、82.4%が行き先の選び方や旅先での行動がコロナの流行で「変化する」と答えた。具体的に意識することは「混雑する場所・季節・時間帯を避ける」「1人または少人数で旅行する」などの回答が目立った。

コロナ収束後に国内旅行に行きたいかどうかについては、「当面は行きたくない/様子をうかがう」が18.6%を占めた。観光需要の回復には、混雑を回避するなどの対策を踏まえた誘客が重要となりそうだ。

東京都八王子市の観光地・高尾山にはコロナ前、年間数百万人の登山客が訪れていた。紅葉シーズンは最も混雑し、ケーブルカーが満員となることも多かった。

地元の八王子観光コンベンション協会は21年秋、来訪者が特に多い週末の登山客を分散させるため、高尾山商店会加盟店で平日限定の抽選会をした。春と秋に多い登山客を平準化させるため、風鈴を飾り付けて清涼感を演出する夏場の催しなどもしている。

担当者は「平準化させる効果があった。登山客の分散で持続可能な観光まちづくりを進めていく」と、コロナ収束後も取り組みを継続するつもりだ。

インバウンド（訪日外国人）をどう迎え入れるかも重要だ。

丹青社と都歴史文化財団などが開発した周遊パスは、スマホアプリで決済から入場・乗車まで完結する外国人向けサービスだ。約40の都内文化施設に入場できるほか、地下鉄も乗り放題になり、安全・快適に観光してもらえる。今後、実証実験を予定しているという。

丹青社の担当者は「個々の施設のポテンシャルは高い。外国人と施設の出合わせ方が大事」と話す。博物館や美術館周辺の飲食店情報なども併せて提供し、さらに回遊を促す考えだ。デジタルの力で訪日客の旅行を充実させ、地域の活性化にもつながる仕組みが徐々に形になりつつある。

こうしたなか、観光事業者のデジタル技術導入へ、都も支援に本腰を入れ始めた。AIによる観光ルート設定や、観光客の行動履歴分析に基づく販売促進などを対象に、22年度から経費を補助する。都産業労働局の坂本雅彦局長は「デジタル技術で良質なサービスを生み出せる。うまく後押ししたい」としている。

◇

コロナ対策のまん延防止等重点措置が解除され、都内の観光産業は再始動の時を模索している。今後の感染再拡大の可能性も視野に入れつつ、持続可能な観光産業をどう実現するか。民間の取り組みや行政の施策を追い、復活への道筋を探る。